

令和4年度小松市立向本折小学校 学校評価 1 (年度末)

めざす児童生徒像

つよく やさしく かしい子

- 【つよさ】 真の強さをもった子に
- 【やさしさ】 すべての人にやさしい子に
- 【かしさ】 みんなでとことん考える子に

※児童生徒結果-教員結果-保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間		年度末		達成状況の分析	改善策		
				児童・アンケート結果 (%)		教員・アンケート結果 (%)					
				教員	※差	教員	※差				
(学校重点項目)	学校重点項目 学びあふむく ちがいを活かす	生徒指導 ①②の項目について、肯定的回答をしている職員割合が平均90%以上 ③④の項目について、肯定的回答をしている児童割合が平均85%以上	① 生徒指導の3機能を活かした授業づくりに努めている。	100		93.3		・児童・教員ともに目標指標は達成した。 ・④について、児童の評価は中間評価とほぼ同じであるが、教員の評価は大きく下がりが、それに伴い児童の意識との差が大きくなった。教員の求める児童像が児童と十分に共有されなかったと考えられる。	・自己肯定感を高めたり思いやりのある温かい人間関係を築いたりすることについて、今後も重点的に指導を重ねていく。 ・具体的な目指す児童の姿、およびその姿に向かうための指導方法について、教員間で話し合い、共有・共通実践を重ねる。		
			② 児童の自己有用感を高め、共感的人間関係を育むように努めている。	100		100					
			③ 児童が「自分にはよいところ、成長したところがある。」と実感している。	100	93.4	-6.6	100			90	-10
			④ 相手の気持ちを考えた言動をしている。	82.4	89.6	7.2	66.7			90	23.3
			集計	95.6	91.5	91.3					
重点項目 業務改善 働き方 意識の向上	業務改善 意識の向上	①②③の項目について、肯定的回答をしている職員の割合が平均90%以上	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	58.8		33.3		・全項目、中間評価を大きく下回った。また、目標指標にも届かなかった。80時間越えの人数は、延べ人数1期2人、3期4人であった。週案の記述方法を変更したり、業務改善への意識を上げる呼びかけをしたりすることで時間外勤務時間平均は、1期63時間、3期49時間と減少し一定の効果は見られたが、業務改善が進んでいる実感を持つことができていない。	・次年度もコロナの状況の変化に伴い、行事の実施方法を見直すことが必要になってくると予想されるが、教育課程の見直しを機会に、各活動のねらいを再確認し、簡素化できる活動や行事は精選していく。 ・年度末の校務分掌の見直しの際に、これまで行ってきた取り組みを効果的に認められるかどうかという観点で見直し、整理・統合していく。		
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができています。	88.2		80					
			③ 定時退校ワーカーの意義を理解し、業務改善のために実践していることがあつた。	58.8		40					
			集計								

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	児童・アンケート結果 (%)		教員・アンケート結果 (%)		達成状況の分析	改善策		
				教員	※差	教員	※差				
				小松市共通重点項目	学校研究	①②の平均が中間・・・85%以上 年度末・・・90%以上	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。			81.3	
② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	87.5		100								
集計											
指導力の向上	①と④の児童の割合が中間・・・80% 年度末・・・85%	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	87.5		86.3	-1.2	66.7	87	20.3	①児童アンケートの結果では、87%と目標指数を上回ることができた。しかし、教員アンケートでは、肯定的な回答が中間結果と比べて20%近く下がる結果となった。意欲的に学習に向かっている児童が少なくなったと教員が捉えていることがうかがえる。 ④児童アンケートでは、88%と中間結果と比べ3%下がる結果となったが、目標指数を上回ることができた。教員アンケートでも、中間結果と比べてやや下がる結果となったことから、意味のある話し合い活動を実施することの難しさを、教員も児童も同じように感じていることが分かる。	①児童が「やってみよう」と思える授業をテーマにした校内研修会を実施し、児童が主体的に学習に取り組む授業づくりを推進していく。
		② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	75		92	17	66.7	91	24.3		
		③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	56.3		92	35.7	80	85	5		
		④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	75		91	16	73.3	88	14.7		
		⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの姿を振り返り、学びに対する達成感を得られたりしている。	100		92.5	-7.5	86.7	87	0.3		
		⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	100		93.9	-6.1	86.7	96	9.3		
	集計	82.3	91.3			76.7	89				
学力の向上	①②③の平均が85%以上	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	93.8			86.7		①②③の平均が77.8%であった。 ①②これまでの取組を継続してきたが、中間を下回る結果となった。PDCAサイクルを確立はしているが、成果を実感することができていないことが要因であると考える。 ③学力向上の取組において、共通実践できるようにチェック表を活用し、指導計画に綴り、月末にチェックを行っている。帯タイムの内容の掲示物を作成し、教室に掲示したところ、校内で統一した取組ができている。 ④職員会議や回覧で、小中連携の取組内容や学力向上の取組等を共有できた。	①②成果の実感ももてるような検証方法【C】や改善システム【A】を構築していく必要がある。 ③学力向上の取組において、授業改善が重要である。授業のレベルアップを図るための取組(ペアでの授業交流等)を充実させ、教師一人一人の目的意識の向上を図っていく。		
		② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	82.4			66.7					
		③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	87.5			80					
		④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	64.3		66.7						
		集計	82.1	77.7		75.0					
家庭学習	①②の項目について、職員の平均が85%以上	① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方を校内で共通理解を図っている。	93.8	76.6	-17.2	73.3	72	-1.3	①学期ごとに各学年の宿題の出し方の一覧を作り、共通理解を図る。また、効果的な取り組みがあれば、職員会議や終礼などで紹介する。 ②取り組みを継続するとともに、各学年の実践を共有する機会を増やしていく。		
		② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	66.7	78.8	12.1	100	76	-24			
		集計	80.3	77.7		86.7	74				